木下杢太郎全集

第二十五巻

木下杢太郎全集

第二十五巻

木下李太郎全集 第二十五巻 第二五回配本（全二十五巻）

一九八三年五月三〇日 発行

定価 四二〇〇円

著者 太田正雄

発行者 緑川亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六四〇

印刷・三秀舎 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 太田元吉 1983 Printed in Japan

目　次

未定稿集　二

某氏に與ふる書……三
湖の底……一〇
〔無　題〕……二七
〔無　題〕……九一
追　憶……一〇三
島原の夜……一〇三
平戸みやげ……一〇五
濠船宿近傍……一一三
戸の外……一三四
老……一五〇

捨つるを難んずる心……一五七
21. Dec. 1915……一六〇
夜の大雪……一六三
伊　東……一七二
〔N・I君〕……一七四
窓……一七八
ポトシンスキイ……一九一
お互に底を割つた話……二〇一
〔歐洲日記〕……二〇五
雨の日……二〇九
鉢の木……二一一
國語國字問題……二一三
お別れ……二一六
安土—京都—堺……二二一
夏の夕……二二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〔無　題〕……二三〇
鐵砲傳來記……二三三
夢……二四〇
〔9. IV. 27〕……二四八
ドン・ジュリオの煩悶……二五〇
ルネッサンスに對する疑……二五六
〔無　題〕……二五九
〔無　題〕……二六三
〔無　題〕……二六六
8. VIII. 1931……二六八
〔札幌における講演〕……二七〇
竹友藻風君の「文學遍路」……二七二
與謝野令夫人に上る……二七三
模倣と獨創と……二七七
七月の雨の夜……二七九

〔無　題〕……二八〇
北　京……二八二
百子千房の圖に添へて鼓山先生の壽康と學勳とを祝し奉る……二八六
〔無　題〕……二八八
物の紛失は手品のやうだ……二八九
〔無　題〕……二九〇
〔無　題〕……二九五
〔無　題〕……二九七
青島東亞醫科學院ゝ歌……二九九
〔無　題〕……三〇二
可食之野草……三〇四
〔隨　想〕……三一一
一本の煙草……三一一
死と恐怖と……三一三
藜園雜記……三一六

あかざ……三一六
新枇杷……三一七
仆れたる水瓶……三一九
責任・反省……三二〇
山川草木悉皆成佛……三二一
須賀川……三二三
夢……三二四
細雪……三二四
芥川龍之介全集……三二五
讀書療病……三二八

對談・座談

一夕話……三三一
芭蕉誹諧研究（第十三回）……三四四
知的教養について……三七一
癩文藝を語る……三九三

奉祝展——洋畫と彫刻……四〇二
奉祝展座談會……四一〇
現下の國語問題……四三八
南方報告……四五七
科學技術と文學……四七四
發言抄……四九二
新春清談……四九二
醫事雜誌記事並に醫書の記述印刷法を語る座談會……四九九
「醫育刷新問題」座談會—醫學教育の目標を何處におくべきか……五〇一
南方醫學を語る夕……五一一
言語政策……五一六
「醫師補修教育」の檢討……五一九

補遺

帝國劇場の裝飾畫……五二七
廿四時間と勞働と……五三二

思ひ出の旅　あこがれの地……五三八
快樂・苦患……五三九
岩野喜久代女史の「萬里の秋」……五四五
後　記……五四七
年　譜……五六五
著作年表……五七九
總目索引（巻末）

未定稿集 二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

某氏に與ふる書

落　去

一、

案外なる貴兄の知人より一書を呈しゆ　まことに貴兄は伊東ニ於てわが先輩なりき、生幼にして貴兄を知らざりき、中比、同窓會、鄕友會ニ於て貴兄と一面の識をうるに至りしがいまだ今に至るまで肩を打つて「君と呼び腹藏なく談笑するの機會ハ之を得ざりき、一而して、今ハ俄かに馴れ〳〵しくも肩を打ちて君と呼ばむと欲す、願くハ之を迎ふに異樣なる一瞥を以てするなかれ、蓋し一片□(空白)の氣禁せむと欲するも禁する能はざれハ也、

二

われら屢、人之伊東咀ふをきゝき、

其所以とするハ氣候の溫和ニ過るにありき、鄕人の平凡なるにありき、而して風義(ママ)の壞れたるニありき、われ伊東ニ生れ、伊東ニ育ちき然かも遂ニ伊東を□りすて、またしば〳〵白眼を以て之ニ對しき、

われ之を以て、時ある每ニ、或は奧豆ニゆき、武甲の境を訪ひ、信州ニ遊び甲山を登りき、されどもまた得る

所多からざりし也、

こゝニわれ一事を語らむとするあり、生、生れて十八九年、爲さず、勞せず、考へすして空しく幾時を送りしが、一たび自ら顧み自ら憂ひ、夏蟲のひたすら火を望みて走るごとく、わが生のよつてかゝる所を知らむと欲し日夜心身を勞しき、わが伊東、あき足らすとせしも此惱ありけれハ也、

生旅して近縣を登涉せし折也き　一夕奇緣ありてゆくりなくも一僻邑の教會ニ於て東京ニ名ある基督信者を相かこみて、人〻胸襟をひらきて相きゝ相かたるの席に連りしことありき、やがて日も暮れて夜となりぬ、一同會食したる後、彼の人の說教、信徒の讚美歌をもきくことゝはなれり、

げにあはれなるハわれ不信者なりき、われハまた立ちき、而して歌ふ可き歌を知らざりき、また歌ふ可き謂れをも未だ敎へられざりき、われ、室の隅に躊躇してたゝひたすら願ひぬ、願くバ、神を中心とせる、愛の波動の、人々の胸底を貫ける幾筋が、われ不信者なる一異分子の爲に進行を妨げられて、其惡き痛き反動がかの人々ニ響き及ぶなかれと、あゝされど此願誰ニ向ひてやせむ。

此夜ひとり道を行きて、われ仲間外されたる兒の如く、わが身さびしく人羨ましかりける也。

三、

かくてわれ旅中慰めを得ず歸思禁すること能はずして遂ニ故鄕伊東ニ入れハ山の彼方に海渺茫としてつらなり、新井に家の數〻、海上に船のかづ〳〵手にとる樣ニみえぬ、われ立ちて眺めぬ、而して出たら目のうたを歌ひぬ、まことに、心ひかみて家出せし息子の如く、われ、母の懷の波穩なる海をながめ入りけり、

あゝかくて、われ奚ぞ伊東をのゝしらむ、あゝ伊東を咀ふものゝ心小きよ、かれら、汽船の競爭を見、高屋の

數殖えゆくをみ、自轉車の入れるをみ、人の智ませしをみる毎ニ憤悶ニたへぬが如し、あゝ心狹き哉、われもかつてハかくありける也、

四、

われ今にして之をみる、伊東の事、殆んどたのしからぬハなし、撰擧の騷動も物質上の繁榮も、行上の痴語、われみなことを讃す、

伊東の地昔三千石と稱して廣袤いと大なり、地海ニ面し交通の便よし、いひかふれハ伊東は若き伊東なり、彼益〻進まんと欲す、物質的繁榮の如き第一ニ求むる可き道筋なり、而てわれら人間其胸底に發達せよ！　發達せむとする努力に人生の價打ありといへる叫をきくもの、これを見て喜ばさらむや、われらたゝ發達進歩をよろこぶ、預め其物質的と否とを問はむや。

夏の朝氣冷かにして太陽始めて上るとき、面ニ紅色を帶び、血潮の如き海水を航しゆく、魚船のかけごえを君きかすや、

われらこれを喜ぶ、これ、伊東ニ與する大自然の希望の聲にして、また伊東の性質たらざる可からず。

五

更に入浴途上の男女の痴語に耳塞くものよ、藝者の跋扈に顔しかむるものよ、われ汝ニ告げむ、それ情慾のこと人間誘惑の最大なるものなり、而して彼男女の族、かつて之を制する丈教訓を與へられたりや、之を輕んする可く、神の存在を父祖より教へられたりや、あゝかれら是等を教へられざりき、かれらの生命を賭せる荒き

海上生活の慰藉ニ之を官能ニ求むること、寧ろ憫む可くして毫も怒る可きにあらざるに非ずや、
あゝ汝等のうち、誰か之ニ最初の石を拋けうるぞ、
たゝ願くハ信仰を得し人、經驗ニて悟れるものハ、かれらを導き訓へたまへ

六、

われら唯伊東ニ慊たらすとするハ其溫泉也、君或は怪まんか、吾れとても之を讃せざるにあらす、魚きり(ママ)、田すきて勞れたる人の、一浴する所へ昔時此鄉はしめてひらけ、われらの曾祖の荒地を開き道路を開きて後勞れていりし所のものニやあらむ、美しの里に美はしの泉よ、然れども、今日寒暑、他鄉の客、之が爲めに入り込むもの漸く多からむとし、鄉人之か爲めニ計をなす、或人之を目して俗人伊東をみだるものとなす、われかれらの俗人なるや否やを識らざれども、寒烈しく暑嚴しき際、鄉人孜々としてこれつとむるの時、かれ美酒にゑひ湯ニ入りて快と呼ぶ、あゝ、地位と金錢の故を以て、悠々として他鄉ニ遊び、怠惰を以て勤勉のものに誇らむとす、兄よ、われらを之(ママ)を堪へえむや。
されと見よ、われかくかき來りて自ら省るに、幾度か、此筆を折り、紙を燒かむと思ふ。——噫たへがたき苦痛かな。

七

われいま伊東を讃しぬ、尙其風光につきていはしめよ、かの地球創始の際の希望のことき夏朝の登旭ハさきにのべたり、これ不知不識の間伊東の人士ニ與ふること少なしとせむや、あゝ漁夫を見よ、肉逞うして勇敢死を

恐れざるにあらずや、

われら、間食の爲めニ三度の飯のうまさを知らさる遊墮のものよ、のろはれよ、さばれ、身伊東ニすみ、日常孜々として勉めたる人こそ幸なれ、

時ニ人繁き伊東ニあきて自然のさゝやき聽かむと欲りせハ、黄昏風さびしき岡ばしの逍遙こそいと胸すく業ならめ、音無の森黑く立ちて、靜寂あたりを襲ふ、沈思暫くにして既ニ河音もきこえず。

夏の夕ハ横いその夕照海ニつゝきてかへりくる舟の足もはやし、もし新井の宮ニ上りて、月夜宇佐美の方をのそめハ水天限(なし)く山淡くして消えむとす、しば〳〵其大海の一部なるをわすれ、身湖畔にのそみて限なき憂ひいたはるか如し、されども水靜かにして望遠きとき、われらハ、世のくるしみ、なやみを忘れ母の懐に眠れる兒のことくにおもへることあり、

われ山水を好み、しば〳〵山川を登渉しぬ、左れどわれ伊東の海を望みて何れか優れりしを思ひ浮ぶることなし。

八

禿筆をかし、言遂ニ長くなりぬ、油もつきぬとおぼし、されどもわれニ最後の告白をなさしめよ、げにわれ之を訴へむが爲めニ、此書を貴兄ニ認めたれば。

さきにいひしが如く、われ寒村の教會ニ惱みき、而かも未だ、神を認むる能はさる也、げにわれら先人より教へられざりき、われら自ら之を尋ねさる可からず、われ常に「或物」の存在するを心胸ニほのめかさるゝ心地す、されとかくて得しものハ皆まぼろしに過ぎざりき、われはかなき不信者ハ基督の下ニ集ふ人の席ニ連る能

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c